

あしき人は登山者、極悪人はクライマー

OWCC 中川和道 20230118

年末年始にふとかかってきた電話。電話の主が「山を眺めるか踏み込むかは、昔からよく問われてきた話だね」と言う。今回はこれを考えてみた。

雪山の良さのひとつは、何とんでも、白い雪に埋められてまあい柔軟な山に戻ることだ。言わば、山が原始の姿にリセットされ直す。その雪山に踏み込んでしまうと足跡が残る。真っ白な山を傷つける。だから山は登るものではない、遠くから眺めるものだというのだ。

高校の古文の授業では、これを連想させる文章があふれていた。枕草子や徒然草などだ。徒然草(下)第137段『花は盛りに』を中川が勝手に拡大意識すると、こうだ。「よき人は、ものを楽しむ様子もあっさり。冬には趣ふかく降り積もった雪を、離れたところから静かに眺める。ところが、あしき人は、雪の庭に走り出て足跡をつけて台無しにする。・・・」桜の花見の記述はさらにひどい。あしき人は他人を押しつけてずかずかと近づき、じろじろ眺め、酒を飲み歌い、ついには大きな枝をもぎ折ってしまう。清らかな泉を見たら、あしき人は、手を突っ込んでかき混ぜ、泥で汚してやっぱり台無しにしてしまう、などなど・・・要は、立入らずそっと眺めることこそが、自然に対する善良な人間のあるべき姿だという。

冒頭の電話の主は言う。登山者は山を眺めるだけではすまず、山に立ち入って登ってしまうから、我々は「あしき人」。中川くんみたいなクライマーに至っては、緑色に美しく輝く氷柱にアイスパイルを打ち込みアイゼンを蹴り込みアイスハーケンをねじ込んで攀じ登るのだから、これは「極度にあしき人」=「極悪人」ということになるのだろうかねえ。

うーん、さて、足跡イコールあしきものだろうか？と考えた。実は、足跡で心が暖まったことがある。雪がおさまった晴天の日、雪原にはうさぎやカモシカの足跡が見られる。たどっていくと、別のウサギと合流し、跳ね回ったあと、同じ方角や異なる方角に向かったりした様子が見て取れて楽しくなった。冬の鈴鹿-藤原岳では、ウサギが歩いた足跡の雪が踏み固められた一方、他の部分は風に削られて消失し、雪原に浮き上がった足跡(ポジの足跡とでもいうのだろうか?)が、点々と続いているのを見た。自然の造形の豊かさに感動した。

足跡で心が暖まったのは、何も、動物の場合だけに限らない。広大な雪原に自らの道を作って北穂高岳に向かう登山者のトレースを見て、自由さや雄大さといった感慨を今年5月の涸沢で抱いた。これは、中川だけだろうか？雪山のトレースに限らず、人は、足跡や道に人生を重ねてきた。徳川家康は「10里の道は9里からが要点」と人生を説き、ポール・アンカはMy wayでI did it my wayと作詞、Kiroroは足元に道があり前に未来が見えると歌う。あしき人なんて、ない。

徒然草をお書きになった吉田兼好法師の物言いは、2分法に傾きすぎなのだろうか？2分法による分断が何ともうっとおしい昨今、法師に本心を聞いてみたいと思うのは、中川だけだろうか？

大島亮吉はどうだろう、スポーツ登山はどうだろう、いろいろな論点がありそうだ。